

イチゴ炭疽病の発生に注意しましょう

当センターが8月上旬に実施した巡回調査において、いちごの育苗床の一部で炭疽病の発生が認められました。本病は夏季の高温・多湿によって発生が多く、向こう3か月の気温は平年並～高いと予想されており、発病株の増加が懸念されます。

本病は育苗期が特に重要な防除時期です。苗を注意深く観察し、定植前の苗の選別を徹底し、本ぼでの被害を未然に防ぎましょう。

1 炭疽病の症状



写真1 葉の斑点型病斑

初期症状の斑点型病斑を見逃さないようにする



写真2 葉柄の黒色陥没病斑

病勢が進むと、鮭肉色の分生子塊がみられることがある



写真3 苗の萎凋症状

萎縮し、クラウンや葉柄が暗褐変し、枯死する



写真4 本ぼ定植後の萎凋症状

感染した苗を定植すると、早いものでは定植数日後に萎凋症状が現れることがある

2 防除対策

- (1) 苗を良く観察し、発病株や感染が疑われる株は見つけしだい取り除き、ほ場外で嫌氣的発酵処理（抜き取った株を穴の空いていない肥料袋等に詰め、空気を排出し口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置する）等により処分する。

- (2) 病斑上に形成された多量の分生子が、雨やかん水等、水滴の跳ね返りによって飛散し伝染する。そのため、頭上かん水は控え、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
- (3) 植物体の濡れ時間が長いと感染・発病が助長される。かん水は午前中に行い、夕方には地上部が乾いた状態になるよう、かん水の時間や量を調節する。また、日照の少ない場合は、遮光資材の除去や株間を空けることで、採光性と通風性の確保に努める。
- (4) 症状が出てからの防除は困難なので、表1を参考に発生前から薬剤のローテーション散布を行う（[イチゴ炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページに掲載中）。
- (5) 定植前に本ぼの土壤消毒を行う。
- (6) 育苗中に本病の発生が見られる場合は、発病株の周辺の株も感染（潜在感染株）しているおそれがあるので、定植前に苗の選別を徹底し感染株を本ぼに持ち込まないよう十分に注意する。

表1 イチゴ炭疽病に登録のある主な薬剤

(令和3年(2021)年8月11日現在)

農薬の名称	希釈倍率	使用方法	使用時期	本剤使用回数	有効成分の名称	有効成分の総使用回数	FRACコード
サンリット水和剤	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	シメコナゾール	3回以内	3
セイビアーフロアブル20	1000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	フルジオキシニル	3回以内	12
ファンタジスタ顆粒水和剤	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	ピリベンカルブ	3回以内	11
キノドーフロアブル	500～800倍	散布	育苗期	3回以内	有機銅	3回以内	M1
コサイド3000	1000倍	散布	-	-	水酸化第二銅	-	M1
ペンコゼブ水和剤	600倍	散布	仮植栽培期 但し収穫76日前まで	6回以内	マンゼブ	6回以内	M3
アントラコール顆粒水和剤	500倍	散布	仮植栽培期	6回以内	プロピネブ	6回以内	M3
ジマンダイセン水和剤	600倍	散布	仮植栽培期 但し収穫76日前まで	6回以内	マンゼブ	6回以内	M3
オーソサイド水和剤80	800倍	散布	収穫30日前まで	3回以内	キャプタン	3回以内	M4
ベルコートフロアブル	1000倍	散布	育苗期(定植前)	5回以内	イミノクタジナル ベシル酸塩	10回以内(育苗期は5回以内、本圃では5回以内)	M7
ファンベル顆粒水和剤	1000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	イミノクタジナル ベシル酸塩	10回以内(育苗期は5回以内、本圃では5回以内)	M7
					ピリベンカルブ	3回以内	11
タフパール	2000～4000倍	散布	育苗期～収穫前日まで	-	タロマイセス フラバス	-	BM2

詳細は、農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。



6月～8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。
いつものチェック！ 農薬を使用する際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！

